谷戸の風 ⑥⓪

敵か味方か

山内静夫

平成五年一月、鎌倉ケーブルテレビの広報誌に「谷戸の風」の最初の原稿が掲載された。二十五年前のことだ。毎日の放送番組だけではと何か読物になる記事を原稿料無しで社長に書かせろという編集スタッフの命令で始まったもの。全部で一五六本は拙著「谷戸の風」と「八十年の散歩」で発表されている。

そして年を経て平成二十五年改めて本紙に毎月一回同じタイトルで書かせて頂いている。今回が六十回になった。私も馬齢を重ねてだんだんスタミナ切れの感否めず、されど自らに終止符を打つ勇気もなしで今も又この原稿紙に向って苦悶している次第。と言うのも何か急に書けなくなるような事態が起りはせぬか、そんな無意味な不安がふっと襲って来たりする。「お年よりお若い」というような無責任なお世辞に惑うことなく、自然体にしていればいいのだ。

しかし、その自然そのものが安泰でいられないのは目下最大の関心事であろう。豪雨のもたらす被害の恐ろしさは初めて知った人も多いのではないか。人命が大切なのは言うまでもないが、日常の平穏な生活の場へ突如泥水が流れこんでくるような理不尽に出合った人達の悲しみ、恐怖―他人事とは思えない。国家は国民の安寧を守ることが最高最大の責務の筈、飛行機一機でどれだけの治水事業が出来るか、すぐに考えて頂きたい。

木版画　藤本宿

文学つれづれ ⑯④

翁と乙女（七）

赤羽根龍夫

春山入りの行事のうち、翁が中心的役割をするのは、国見をする翁という形のみが近代にいたるまでも残されていたが、歌垣の場での主人公ももともとは翁なのであり、翁と乙女が性の交わりをするということが歌垣の原型であったのではないだろうか。私は、田の神は祖霊であるという柳田国男の説を思い起こしているのである。九人の乙女たちが嬉々として翁になびいたのは、万葉の時代にすでに久しく忘れられていた祖霊を竹取の翁にみたからなのである。

人が年老いて死ぬと魂は山に入り、それが何十年か後に祖霊となり、春の初めに田の神として帰ってきて子孫に豊饒をもたらすというのは柳田国男の卓越した説である。祖霊は多くは翁の姿をとると考えられ、祖霊の種をうけるのが巫女としての村の乙女たちの務めであった。その時、祖霊の憑依（よりまし）としての村の長老と、選ばれた村の乙女との性の交わりが営まれたであろう。そしてそれを囃（はや）しつつ共感しつつ村の若い男女が交わったのが農耕民族としての日本人の祭りの起源であったのではないだろうか。

さて、春山入りの帰り道、乙女たちは山カズラの花を髪にかざして山から下りてくる。彼女らが田の神に奉仕する早乙女になったしるしである。

「神の表象と考えられた山の花を摘むことによって、乙女は神に感染し媒介者である巫女となる。（渡辺昭五）

地方によっては乙女たちはその日から神の巫女として田植えの日まで男を避けて厳重な物忌みの生活が始まるのである。

翁と乙女が並び立つ姿は、正月にその年の豊作を祈願する田遊び（春田打ち）にもみられる。

田遊びはもともと田の精霊を誘い出し、その年の豊作を期待して秋の稲の豊かに稔る過程をあらかじめ物まねとし演じると、田の神がそれに感染してその通りのことが実現するという感染呪術（カケマワザ）の行事である。東京下赤塚の諏訪神社で二月（旧正月）十三日に行われる田遊びはその典型であろう。

ここの田遊び祭りには境内の一面にシメをめぐらした祭場を設け、その中に田んぼに見立てた大太鼓を据え、田ならしから稲刈りまでの一連の作業を身振りおかしく模倣していくものであるが、まさに田植えの模倣が始まろうとする時に、呼出し役の「やァすめ、たァろじ、はかやっか出ろ出ろ」の声と共に太郎次と呼ばれる翁の面をつけた男が紺のハッピを着て股引をはき、腰にスリササラ（男根）をさして踊り出ると、その後を媼（おうな）面をかぶる面は媼面と云われているが、どうみても若い女の顔である。

翁面を被った者と媼面をつけた者が抱き合う仕草をするのは外に長野県新野（にいの）の正月十四日に行われる雪祭りにもある。そこで演じられる「神婆（かんば）」では媼面をつけ、赤い木綿の布で頬冠りをし、振袖を着た神婆が軽快に跳びまわって舞っている所へ、翁面をつけた爺が足腰の立たぬ様子で杖をついて大儀そうにいざりながら出てくる。やがて神婆が爺を見とめ手招きをして両手をひろげると、とたんに爺は杖を捨ててとっとと駆けよって婆に抱きつく。本田安次によると、もとはそこにムシロを敷き、二人はその上に寝転んだという。

（神奈川歯科大名誉教授）

下赤塚田遊びの「やすめ太郎次」＝本田安次「翁そのほか」より

疫病や災いを祓う

勇壮な天王祭の海上渡御

江島神社境内末社の八坂神社の例祭・天王祭が7月上旬行われ、祭神がゆかりある腰越までお出かけになる神幸祭が7月8日あった。

祭典後、ふんどし姿の担ぎ衆に担がれた神輿は石段を下り、「ヨイヨイヨイヨ」の掛け声も勇ましく江の島弁天橋から海に入った。海上では神輿が浮きつ沈みつ揉み合う勇壮な禊が行われ、神職船は海上からお祓いし息災を祈願。炎暑のなか、島内は渡御を見守る大勢の観光客でごった返していた。

終の棲み家を考える ⑤②

上棟祭について

上棟式・棟上げ・建前・建舞ともいわれ、土台・柱・梁と組み上げられ、最後に一番上の棟を組み終え基本構造が完成した段階で行う儀式で、これまでの工事の無事とこれからの工事の安全を願って行われるものです。昔は屋根の上に祭壇を設けて男子だけで儀式を行っていたようですが、最近は1階で行われる事が多くなりました。

儀式を神職にお願いする場合は、一連の儀式の中に曳網の儀・つち打ちの儀・散餅銭の儀や鳶職による木遣りの奉納等上棟式特有の儀礼も行います。

祭壇の飾り付けは中央に魔よけの為の幣串を飾り、表に祭神4命と氏神様を書き、裏に建築主・設計者・施行者が書かれたお守りの為の棟札を置きます。米・塩・水・神酒・海の幸・山の幸もお供えしお祝のお酒等も並べます。神職による修ばつの儀から始まり、手締めまでの流れで上棟祭が行われ、終了後幣串と棟札は棟木の下に取り付けます。

略式で行った場合の費用は神職に3～5万、祭壇に2～3万、参列者に弁当を持たせる場合3～5千円、職方に御祝儀を出す場合5千～2万円位。考え方は建て主が施行者に対して労いと感謝の気持ちで行う事が多いようです。骨組みだけしかない状態ですが、木つちの音や鳶職の木遣り掛け声、良いもんですよ。

■日向建設　鎌倉市大船1―15―3
☎0467・47・5454　http://www.hyuuga.co.jp

堀江 牧生 & 新見・F・浩子 デュオ リサイタル
ショスターコーヴィッチ：ヴィオラソナタ 作品147 チェロ版
ベートーヴェン:ソナタ 作品47「クロイツェル」チェロ版
グリーグ：ピアノとチェロのためのソナタ 作品36
8月10日（金） 19：00 開演（18：45 開場）
スタディオ　ベルソー（茅ヶ崎）☎0467-38-8133
前売/3000円（当日3500円）全席自由
予約・問合：主催 アンシェル ☎ 050-3786-0713

[Horie Makio Vc]

鎌倉朝日 歌壇

香山　静子　選

一尺の境界跨ぎ握手する南北のボス　夜明け来るかや　辻堂　柳　蒼柳

時事詠としての鋭さがある。

木の陰に十薬ひそひそ話すらし土の下にて皆手をつなぎ　逗子市　湊　美根子

結句に発見があって楽しい。

病床で歌詠みはげむ兄の背の向こうに広がる額縁の街　津　石川　韶子

下句に明るさがあり、お兄さんへの愛情が感じられる。

日出づる金波銀波の海分けて乗合船は沖へと急ぐ　片瀬　中村　喬

たくさんの溜息運んで行くバスの病院帰り窓を打つ雨　笛田　入野　裕江

ほの白き日陰のあじさい風に揺るかすかな愁い振りまきながら　梶原　中澤　二郎

菜の花の迷路をめぐる子らもなくソーラーパネルの反射がおおう　岡本　鳴海　紀政

生ビールの泡の白きに夏の来てネオンの街の暖簾分けたり　葉山町　近藤　純

寺庭に蛍袋が三つ四つ顔赤らめてうつむいており　材木座　有野裕美子

女子マネとキャプテン見つめるその先で相手校決まる夏の大会　大船　小笹岐美子

弥生期の埴輪はポカンと口を開けスマホを向ける人等を見てゐる　今泉台　下田　和夫

鎌倉朝日 俳壇

星野　高士　選

〈天〉三線の唄を吸い込む夏の空　笛田　上田　満喜

三線の音のみではなく唄も吸ひ込む夏空が眩しい。

〈地〉魚焼くにほひ小路の梅雨入かな　本鵠沼　森田　順子

魚焼く匂いと小路は昭和のレトロな感じであるが、梅雨入の季題で今をうまく捉えた。

〈人〉夜空には末広がりの花火かな　岡本　森田　孝

夜空と花火はいくらでもあるが、末広がりは作者の発見。また縁起もよさそうだ。

白靴や雨の中にて汚れおり　城廻　塩田　文子

白靴は夏の季題。雨の汚れも思い出となる。

筒鳥のとほきこだまや雨意ふふみ　逗子市　塩谷あい子

筒鳥はホトトギス科の鳥で、遠きこだまは雨を連れてくるという発想が面白い。

夏帽子深く被りて病院へ　今泉　小林刀羊子

病院へとあるが夏帽子を深く被っているとは通院の一風景か。余韻が大事だ。

ルピナスの虹の七色天仰ぐ　腰越　大川　昭子

百日紅その家と共に消えにけり　材木座　有野　冬花

蚊遣豚いまだ健在今世紀　笛目町　出蔵かおる

ねり歩く祭囃子や路地の人　腰越　松原　薫

一気には済ませぬ用事梅雨晴間　金沢区　岩澤　正春

雲水の草鞋の指や走り梅雨　岩澤　玲子

五月闇はるかに潮の音聞こゆ　植木　風見　玲子

稲妻の走る田園に実りかな　川名　槇野あさ子

避暑衆し大き荷物にある笑顔　葉山町　近藤　純

海眺めプールで泳ぐ現代っ子　逗子市　塩谷あい子

あじさいや一株残し地鎮祭　腰越　小河　哲美

夕立や砂丘に雨の跡残し　岡本　鳴海　紀政

ふくらめる月下美人と過ごす夜　手広　高口　道宏

鎌倉朝日 発刊協力グループ 朝日新聞サービスアンカー

ASA鎌倉小町 材木座一―一〇―三七―一〇三 ☎22―3236
ASA鎌倉中央 長谷一―一―九 ☎22―1004
ASA北鎌倉 大船二―二三―一六松栄ビル3F ☎38―7322
ASA鎌倉深沢 常盤二四七―二 ☎31―1444
ASA大船西部 玉縄一―一四―一 ☎46―6068
ASA大船南部 大船二―二三―一六松栄ビル3F ☎38―7322
ASA大船中央 大船二―二三―一六松栄ビル3F ☎38―7322
ASA腰越 藤沢市鵠沼藤が谷二―一―二三 ☎0466―27―8716
ASA藤沢南部 藤沢市鵠沼藤が谷二―一―二三 ☎0466―27―8716
ASA藤沢東部 藤沢市弥勒寺三―二二―一一 ☎0466―22―7409
ASA鵠沼東部 藤沢市鵠沼海岸二―一―一一 ☎0466―34―6924
ASA鵠沼西部 藤沢市鵠沼海岸二―一―一一 ☎0466―34―6924
ASA逗子 逗子市久木一―一―一一 ☎046―871―2368
ASA東逗子 逗子市沼間一―四―四 ☎046―871―6845
ASA葉山 三浦郡葉山町堀内一八〇八 ☎046―875―0515
ASA金沢八景 横浜市金沢区六浦一―二一―一三 ☎045―782―2859
ASA大船北部 横浜市栄区笠間四―一―九 ☎045―891―0986